

という意味において現実的・顕在的になった位相空間がコンパクト位相空間に他ならない。

したがって有限な私たちの他者として私たちを無限に超越しつつあたかも有限な私たちと同じように限界を有し私たちに内在する可能性を持つ神ご自身の述語として位相空間が、有限な私たちの他者として私たちを無限に超越しつつ同時にあたかも有限な私たちと同じように限界を有し現実私たちに内在し、私たちと同じ苦しみを苦しみ、十字架に付けられ、私たちと同じ死を死んだ主イエス・キリストの述語としてコンパクト位相空間が相応しい。位相幾何神学は、神を位相空間たとえばユークリッド空間 R^n 、キリストをコンパクト位相空間たとえば球面 S^n と述語付けるのである。

神を位相空間、キリストをコンパクト位相空間と述語付けることは、神あるいはキリストを位相空間あるいはコンパクト位相空間という位相幾何学の理念によって定義することでは全くない。ある哲学的な理念したがって数学的な理念によって神を定義することは、その理念を神の偶像とすることに他ならない。位相幾何神学は偶像崇拜では全くない。位相空間やコンパクト位相空間は、神の本質を定義する偶像ではなく、私たちに人間に見える限りにおける神の像すなわち神のアイコンに他ならない。言い換えればユークリッド空間 R^n や球面 S^n といった位相幾何学の図形は、イエス・キリストの板に絵具で描かれた図像と同じように、神が自らを啓示するアイコンなのである。

初期R・ロランにおける芸術と宗教

掛川 富康

ニヴェルネーの一小邑クラムシーから、パリのリセ・ルイ・ル・グランへ、さらに高等師範へと進んだR・ロランは、母親の教育熱に助けられながら、芸術面、とくに音楽においてはすでに卓越した感受性と技巧を備えていた。しかし、音楽家への道は早くも自覚的に断念し、高等師範では、ドイツの文献学に習ってフランス歴史学に革新をもたらそうとしたG・モノーに学び、この師の推薦によって、フランスの俊英の集まるローマのファルネーゼ宮、フランス考古学院に学んだ。ローマ時代、自身は古文書への沈潜と歴史遺跡に足をはこぶ毎日であったが、このロランを社交界に導き、人間的にも著しく成長させたのは、すでにパリで、モノーに紹介された年長のドイツ人女性の「理想主義者」M・v・マイゼンブークである。

ロランの内面性の理解のためには、一九世紀後半のフランスとドイツをおそい、マイゼンブークの中で拮抗していた、レアリスムとイデアリスムとの相克を理解する必要がある。かつてスタール夫人の発見した、ゲーテ時代のイデアリスムのドイツではなく、ビスマルクの体現するレアリスム(F・ベルトー)が、ロランの時代のドイツであり、そこにロランはドイツ精神の退廃を見ている。他方、同時代のフランスも、世紀の初頭のロマン主義以来、積極的な価値に領導されることなく、懐疑・唯物主義・厭世主義・デカダンの享楽主義に支配さ

れていた。

ロランの中に、芸術への愛好と自己の精神世界によってすでに存在していたにせよ、彼の存在を支配していたのは、イデアリスムスへの姿勢である。イデアールの世界の極限に位置すると同時に、世界内在的に、彼にとっての神、宗教がある。倫理や道徳も、宗教との緊張ある連続性の中に位置づけられ、この点、フランス社会に政教分離をもたらしたライシテの唱道者J・フェリーなどの姿勢と異なる。デカダンスの支配するフランスで、このようなイデアリスムスを認知させ、それへの積極的な傾斜をもたらしたのは、ロラン自身の資質と一貫して変わらぬ、ベートーベンを筆頭とするドイツの形而上学的・宗教的な文化世界である。

すでに幼少から親しんだピアノの技巧と音楽への愛着によって、音楽が、彼の存在と不可分に結びついている。絵画よりも、またその読者が知的な階層に限定されるという理由で、その芸術的な普遍性に限定が設定された文学よりも、音楽は、ロランの存在、精神と肉体の全般に関わっている。文学に対する音楽の芸術的な優位の根拠は、文学は文章や推理のディスクルシフな性格に依存するが、音楽は直接他の心情との内面的な交流が可能である点にあるとされる。「音楽は詩よりも内面的で、感情の直接的で深い表現である」。音楽は、精神の深い層に触れているので、「歴史の内面的理解や人間の思考の密かな動きを認識するのに有用である」。古代のギリシャで完成を見ていた、詩と音楽の統一を、ルネサンス以降の近代において、ドイツやフランスの中にはなく、イタリア・オペラの中に検

証しようとし、その意味で、ニーチェと同じく、R・ワグナーを評価する。

民衆への接近と社会主義―ロランの社会主義へのシンパシーは、先行するイデアリスムスへのシンパシーから見て、異質なものと受け取られがちであるが、その伝記を発表したJ・ロビシエが言うように、内容的に連続している。オペラの発生とその展開の歴史を民衆とその担い手となる貴族との緊張の中に見ているが、民衆への視線を自覚させたのは、この演劇である。

最近のハーバーマスの宗教論について

――世俗倫理と宗教倫理の間――

後藤 正 英

過去十年ほどのハーバーマスの議論を振り返るとき、まず気づくのは、宗教に関する言及が数多く見受けられるようになったことである。その理由はどこにあるのか。ハーバーマスはどのような観点から宗教を問題にしているのか。今回の発表では、ハーバーマスの最近の幾つかの論考を中心に、彼の宗教への関心の在り処を明らかにしたい。さらには、今日の世俗倫理と宗教倫理をめぐる論争の中でハーバーマスの議論がどのような位置づけをもつのかについても考えてみたい。

近年のハーバーマスの議論を振り返ろう。ハーバーマスは、同時多発テロ発生後一カ月を経過した二〇〇一年十月一四日に、「ドイツ書籍協会平和賞の授賞式で「信仰と知識」という講